

常磐津三味線方・人間国宝

# 常磐津 英寿

Eiju Tokiwazu



## 「病気は本当に人それぞれ、病気もまた人生だなと思います」

今月は常磐津三味線方で人間国宝の常磐津英寿師にご登場いただいた。研究者のように理詰めで柔和な口調、そして三味線を構えて撥を振り下ろす瞬間の緊張感——そのコントラストには芸を究めた演奏家ならではの雰囲気を感じさせられた。師走の午後、英寿師を東京・銀座の稽古場に訪ね、修行時代を含め4度の大病を患ったことを中心にお話を伺った。

……何度か大病をされていますが……

まず23歳から結核を長く患いました。次に43歳で胃潰瘍の手術を受けています。それから54歳で亜急性甲状腺炎という珍しい病気。4度目が68歳で直腸に出来た前癌を切除しました。

——当時の結核は大変だったのでは？

当時の結核は一生を左右する大病です。私も腰椎に膿瘍が出来、最終的には背骨が駄目になる、即ち三味線は弾けなくなるだろうとの診断でした。江戸時代から続く常磐津三味線の家に生まれ、その道で生きていこうと決めて

いましたから、これ以上ないほどの厳しい宣告です。諦めて別の道に進もうと思い、ラジオや録音の原理などを病で学んだほどです。

それがストレプトマイシンという特效薬が使えるようになり、奇跡的に回復しました。復帰出来ると喜んだのですが、それも束の間。膿瘍が出来た右側の肋骨の一部を切除しなければならず、三味線を弾く上で、大きな障害になってしまいました。

結核を患ってからの10年は、まさに病気と闘い続けた日々です。地道な治療やリハビリで回復はしましたが、二十代といえば一番稽古をしなければならぬ時期。同年代の演奏家が歌舞伎などの舞台上で活躍していたこともあって、本当につらかったです。

——その後の病歴についてはいかがでしょう？

胃潰瘍は仕事が多忙に忙しかったから。亜急性甲状腺炎はストレスが原因。直腸の病気は年相応といえなくもありません。結核に比べたら、その他は身体のメンテナンスのような感じですね。あの時の試練を思えば、演奏や稽古での厳しさなど幾らでもありません。

——病気から学んだことは？

病気は本当に人それぞれ、病気もまた人生だなと思います。大きな試練を与えられて、相応な忍耐力はついたでしょう。また、どんな病気なのか、ど

んな薬を処方されているのか、好奇心や研究心の対象になったようなところがあります。元来が理解して納得しなければ気が済まない性分なのです。

亜急性甲状腺炎の時はひどい腫れと頭痛に悩まされて、病院ではステロイドを処方されました。実によく効く薬ですが、それだけ副作用もある強い薬です。当初は医師の指示通り服用していたのですが、症状が楽になるにつれて、こっそり分量を減らしていったのです。最初は4分の3、そして2分の1……。結果はすっかり回復していません。医師は専門家ですが、患者の訴える症状に客観的に向き合っています。まずは自分で自分の症状はどうなのかをしっかりと感じて、能動的に治療したほうがいいのではないのでしょうか。

人間の身体の不思議さも実感しました。結核のせいで肋骨を切除したのですが、常磐津を語ったりして大きな声を出すと、そこから肺がはみだすのがわかるほどでした。それがいつの間にか切除した部分の上と下の骨が太くなって、隙間を埋めてくれたのです。人間の身体の再生力に驚かされました。

——入院患者の皆さんにメッセージをお願いします。

病気や怪我との闘いは大変ですが、どんな時でも希望を持っていただきたいと思います。私が二十代で結核を患った時も、前向きな姿勢だけは忘れませんでした。